

## 地震など災害考

日高医師会  
新ひだか町立静内病院

林 卓宏

「疑いもなくわれわれの大きな仕事は、遠くにある不明瞭なものを知るのではなく、手近にある確実なことを行うにある」

(トーマス・カーライル 1795-1881)

世の中で恐ろしいものを順に並べた表現で、「地震・雷・火事・親父」ということわざがあるが、日本人にとって一番の恐怖は今も昔もおそらく地震ではなかろうか。少なくとも自分にとっては、全く異論はない。しかしながら、忘れたところにいきなりスマホが鳴り出す緊急地震速報のJアラートで、びっくりする割には地面が揺れなかったり、速報があつてほぼ同時に地面が揺れたりするので、その有用性についてはかねてから疑心を抱いていた。

今年の2月9日に、政府の地震調査研究推進本部・地震調査委員会より「長期評価による地震発生確率値の更新について」が公表された。ほぼ、1年ぶりの更新である。地震の原因としては、海溝型の地震と、活断層で起きる地震とに振り分けられる。北海道に関するものとしては海溝型の地震のうち、マグニチュード7-8以上、30年以内の地震発生率80%以上の地域は、十勝沖・根室沖・色丹島・択捉島沖と発表された。活断層型では、Sランク(30年以内の地震発生確率が3%以上)なのがサロベツ、黒松内低地断層帯である。また、日本全体に目を向けると、政府は大規模地震対策特別措置法を制定し、東海地震発生の予知についても「政治的」に体制化した。これらの資料を見せられると、特に海溝型の地震に関しては明日にでも発生するのではないかと危惧するのだが、しかし、資料の冒頭に「現在の地震学では、地震の規模やその発生日時を正確に予想することはできません」(上記報告3ページ)と明記されている。例えば、根室沖で発生する地震は、それが今日発生しても当たりであり、100年以上発生しなくても外れではない。これは放射性物質の核崩壊に類似している。ラジウム226を例に挙げると、この放射性同位元素は $\alpha$ 崩壊してラドン222になるが、その半減期は判明して1601年である。数多存在するラジウムが、その量の半分になるには1601年かかるという意味である。ところが、そのラジウム1原子だけを取りだして実際に $\alpha$ 崩壊するのを観察するとして、それが10秒後に発生しても、10年後に発生しても、あるいは半減期をはるかに超えて、現生の人間なら絶対観察できないであろう10万年後

に発生しても、別に不思議はないのである。つまりは、現在の科学では、 $\alpha$ 崩壊の確率は分かっても発生を予知することは不可能なのである。地震予知も然りである。

このように、現段階では地震予知の方法はまだ見つかっていない。それ故に地震予知に関する「学問的研究」を進めることは必要と考えられる。そのような現在進行形の「学問的研究」に政治が介入して利用しようとするのは早計であり、かえって混乱を招くということである。実は、この地震予知という「政策」に対して何十億円もの予算を計上しているのが現状で、物理学者の竹内均ら著名学者も口を揃えて、「地震予知は役立つものではなく、なぜなら地震発生はたぶんに確率論的な現象である」と断じている。つまりは地震予知に掛かるこれら予算は、現在のところほぼ無駄金なのである。それより地震災害の被害を少なくするための防災、あるいは地震発生後に必要となる物資の備蓄や環境の整備、人員の確保、建造物の耐震化対策、普段の防災意識を国民により高める教育なりに国費を投じるべきと思われる。一方で、津波警報は十分に役立つ情報と思う。現に、その警報を聞いてから、全力疾走で高台めがけて走って難を逃れたケースがあるので。要は、ある災害予知情報があつて、実際にその現象が起きるまでにその現象に対して備える猶予があるかどうかで、その災害予知情報が有用かどうかが決まるのである。そんなことを考えると、ミサイル発射のJアラートもどうなんだろうと考えてしまう。かの国からミサイル発射、5分くらいで着弾見通しの中、その限られた時間に地下深く逃げ込むことが果たしてできるのか。そもそも新ひだかに地下施設はないのだが、どうしてくれよう。

話が逸れたが、一方で我が家の防災対策はどうかというと、2011年に発生した東日本大震災以来、空いたペットボトルに約12リッターの水道水を毎週入れ替えて備蓄している。入れ替える水は1滴残らず風呂と洗濯に利用している。銭をほとんど使わない、ささやかなエコ備蓄である。ちなみに、入れ替えの水を本来の飲料水として試飲したことは、残念ながら一度もない。

追伸：

これを寄稿したのは今年の4月で、奇しくもそれから6月に大阪、そして9月に北海道胆振東部地震が発生した。もちろん地震を予知してこの原稿を書いたわけではないが、いつでもどこでも地震は発生するんだということを身をもって思い知った。いまだ地震学者と称する方が、次は千葉県が危ないなどと言っているようだが、ご自身の足元を心配した方がいいと建言させていただく。今回の地震で「被災者」の側となった我々だが、これを教訓に皆で防災の意識をより高めることができれば幸いである。なお、本文はあえて4月脱稿当時のままで掲載させていただいた。

最後に、北海道胆振東部地震により被害を受けられた皆様へ、謹んでお見舞い申し上げます、被災地の一刻も早い復興を心よりお祈り申し上げます。